

上記推測の裏付けとしては、網別の罹網魚の成熟度とか、胃内容物等についての調査が同時に行はれなければならぬと思うが、そこまで仲々手が廻らぬ状態である。

以上漁網は材質とか仕立上の問題等により、その効果が漁期漁場、魚群の行動生態、環境条件等によって差の生ずるものであり、

- 罹網率が沖合分布の指数として使われる場合
- 適正目合、脱落の問題を扱う場合
- テグス網又は他の新漁網が出てそれが使用反数の制限と云うような問題が起きた場合

等には充分上記の点を考慮に入れる必要がある。

10. "Review of Oceanography of the Subarctic

Region" について

o
e

平野敏行 (東海区水研)

INPFC の生物学小委員会の一つの大きな仕事に、サケ、マスの分布及びその環境を理解するための北洋の海洋学的研究がある。加盟各国ではそのために、1955年以降毎年北洋に調査船を出して、その調査に当ってきた。これら海洋調査研究の基本的な課題は、1.サケ、マスの生息域及びその環境特性の決定。2.サケ、マス環境と海流や海洋構造のパターンとの関係。3.サケ、マス環境の季節変動の観測及び理解。4.変動をおこす条件及び要因のメカニズムの把握。そして最終的には5.環境変動の予測であるといえよう。

"Review of Oceanography of the Subarctic Pacific Region.

A. J. Dodimead, F. Favorite, T. Hirano” は、このような線に沿って、INPFC 傘下で 1955 年～1959 年までに実施された海洋観測資料のみならず、北洋の海洋学に関連した研究結果を総合して、現在までに得られた北洋の海洋学の知見を集大成しようという意図のもとになされた。そして、その中では、主として、1. 北洋 (Subarctic Pacific Region) における海洋構造、2. その海洋構造を形成し、又変動を与えるメカニズムや、過程について検討、3. これら海洋構造を通してみた北洋の水温、塩分など諸要素の分布 (特に 1955 年～1959 年)、4. これら海洋構造や諸要素の分布にもとづいて、北洋の海況の大きな変動を理解するために必要な、特性領域 (Domains) の決定及びその拡がりについての検討に重点がおかれた。

この報告は、おそらく 38 年中に、日米加国際漁業委員会から出版される。

1. 1. 水産海洋学に関する水研の意見の要約

東北区水産研究所、東海区
水産研究所、日本海区水産
研究所、西海区水産研究所、
南海区水産研究所、真珠研
究所

(昭和 38 年 9 月)

- 1) 水産海洋学はいかにあるべきか。どのような分野を、どのような形でとりあげるべきか。

水産海洋学は水産資源の開発、増殖、利用、保存に関連し、漁業における諸問題を解決することを目的とした応用海洋学であり、水産生物の移動、数量変動、生長、繁殖などに影響を及ぼす環境要因を海洋物理学、